1　収蔵楢林外科書とパレ（一六二七）及びスクレテタス（一六五七）との絵図における比較

田中祐尾
大阪市立大学医学部

標題については一九九〇年パレ没後四百年祭記念誌で、蒲原宏氏により「日本へのパレ外科全集骨関節損傷治療の受容についての再検討＝スクレテタス外科書との対比とその影響＝」と題して三二頁に及ぶ詳細な絵図による研究がなされた。

田中彌性園には楢林鎮山の「紅夷外科宗伝」の付図が古くから表装され掛け軸として遺されていて検討が望まれ、蒲原氏も一度視察されている。

筆者は二〇〇二年度に渡蘭の機会を得てブルハーヴェ博物館付属図書館、ライデン大学医学部、民間の古医書専門店などを遍歴し閲覧対比を試みたが不十分であった。このたびオランダ本国ですら稀本とされる一六二七年版蘭語アムステルダム版パレの「De hir urgie」及び一六五七年版ラテン語ハーグ版スクレテタスの「Armamentarium Chirurgicum」の両冊を入手し、牛歩のペースながら「紅夷外科宗伝」との比較検討を始める事となった。

調査対象の三点が時間、期限、取り扱いに制限なく眼前にある幸運に興奮を覚え、紙間の香りや埃屑の微粒子までもが四百年以前のものだと思うと歴史学者のように冷静ではいられず困っている。的確な共同研究者を求めている次第。現在までの所見を示す。

パレ本の絵図は木版刷りと初期の粗い銅版画で、一方スクレテタス本は陰影を交えた精緻な銅版画である。十七世紀初頭から半ばにかけての僅か三十年間にかくも急速な銅版印刷の技術的進歩が見られ、視覚上鮮明な驚きである。

蒲原論文によると近世日本の外科書「紅夷外科宗伝」（一七〇六）、「金創跌撲療治之書（一七一三）」、「外科訓蒙図彙（一七六九）」の三書の絵図はその三十三％をパレの外科書から、三十七％をスクレテタスから、出

典不明が十五％であったとされ、対比検討の上で大変興味ある統計である。

筆者としては出来れば正確な翻訳の後にパレがスクレテタスにどのような影響を与えたかについて、スクレテタスが自著にどのように記載しているかをたどってみようとした。

もともとパレは軍医としての希有な戦陣医学の累積経験はあるが正統な高等教育を受けていなかったため著作にあたっては、殊にその多くを裂いた解剖学において、ヴェサリウスをはじめ多くの先哲医学者たちの理論や絵図を踏襲せざるをえなかった。

然し乍らパレ以後の医学者、この場合スクレテタスが絵図の上で、パレのオリジナリティが明らかなのにその点何の言及もないのである。

このスクレテタスの代表的著書にはＰＡＲ´Ｅの文字が見当たらず、僅かに外科器具の説明欄に二ヶ所のみ、Ｐａｒæｉ（パレの）というラテン語所有格があるのみで、パレは（主格）とか、パレを、パレに（目的格）といったパレの説明をする文節が全頁を通して皆無である事が解った。

即ちこの二書が著された一六二七年から五七年という時代のドイツ（神聖ローマ帝国）とフランスの間は戦乱に明け暮れる敵国同士であったという歴史的事情があったこと。またヨーロッパの医学会でパレの論文が敢えて無視または軽視されていたという時代背景がいみじくも浮かび上がることとなった。

パレがその医聖としての哲学までを受け容れられ神格化されるに到るのはずっと後世のことと推定され、その辺りの経緯と彼の学問の推移とを今後の追跡課題としたい。